

◇ホームレス歌人◇のいた冬

横浜・寿町にその足跡を求めて⑥

ジャーナリスト

三山 喬

図書館に通うドヤ住人

寿町越冬闘争委員会による生活保護集団申請から一週間ほどたった頃、吉田和宏さん（仮名、四十七歳）は横浜市内の繁華街に立ち、風俗店の看板持ちをしていた。

「生活保護はまだ仮決定みたいな状態なんで、バイトを続けてます。週二、三回、回してもらってるこの仕事は、間に何人も入ってピンハネされるから、時給五百円にしかなら

ないけど、何もしなければ、仮決定のうちには区役所から一日千円もらえるだけなんで、それよりはましかな、と思って」

挨拶から一瞬間の間をおいて私の顔を思い出した吉田さんは、近況をそんなふうの説明した。生活の基本的なパターンは路上生活時代と変わらず、バイトのとき以外は、中央図書館や蒔田公園で過ごししているという。寝泊まりする部屋だけは、仮決定によって二年半ぶりに確保したが、彼の選んだのは同じ寿町の簡易宿所

見知りかけっとう声をかけてくる。

空き缶拾いでも何でも、自分で稼いでる人ならいいんですよ。僕が嫌なのは、万引きの話をしてきたり、人にたかたりするだけの連中。中には、全然知らない相手なのに寄ってきて、缶コーヒーをくれたりする人もいる。要はそうやって、何かのとき、千円でも二千円でも借りられる関係をつくらうとするんです」

私が改めてインタビューをしたのだと告げると、いったい何の取材なのか、と吉田さんは警戒するよう聞き返してきた。私はカバンから『望屋』の最新号を取り出し、このような連載をしているのだと説明した。

「本当はこの公田さんという人に出会えれば一番いいんだけど、難しい。だから、同じ寿の人たちに話を聞いている。彼の作品を見て、感じるこ

とを話してくれるだけでもいい」

現実にはなかなか、このテーマで路上の人たちと話がかみ合わないのだと、率直に悩みも打ち明けた。この吉田さんはどこか違う。その落ち着いた語り口や、時間潰しのため中央図書館までよく足を運んでいるという話から、私はそんな印象を抱いていた。

「本好きの人に会いたいのなら、朝九時半の開館前に図書館に行ってみるといい。集まっているのは野宿してる人だったり、生活保護の人だったり。だいたい、いつも似たような顔ぶれですよ」

言われてみれば、そうなのかもしれない。よほど、ホームレス然とした身なりでもしていない限り、図書館利用者からそういった人を見分けるのは無理だろう、と決めつけていたのだが、地下道などで野宿する

（ドヤ）でも地区の外縁部にある一棟。出入りする際には迂回して、地区内の通りは歩かないようにしているという。

「やっぱり嫌ですから。あの街はちよつとね。だって酔っ払いだらけでしょ」

路上生活者であれ保護受給者であれ、寿の底辺の人々とは一緒に見られたくない。そんな気持ちもあるのだろうか。

「それはありますよ。こうやってバイトしていても（ホームレスの）顔

人たちは午前六時には、寝床を片付け、移動しなければならぬ。図書館に行くにしても、動き出しは早はずである。

私は、公田さんと似たような時間の過ごし方してきた吉田さん、しかも二〇〇八年の初夏から路上生活になったという時期的な共通点も持つ彼に、何としても詳しく話を聞きたいと思った。

後日、これまでの連載の写しと、公田さんの全公表作品を書き写したものを吉田さんのドヤに届け、読んでもらったうえで改めて会うことにした。彼のドヤは確かに寿町の端に近く、見上げれば横浜の高級住宅街・山手地区の高台もすぐそこに迫る。黒沢明監督の『天国と地獄』は伊勢佐木町の一角を舞台とした名画だが、誘拐犯に狙われる資産家が暮らしている「天国」はこの山手地区